

佳作

空手を通して感じたことできること

三郷市立幸房小学校 6年

山本 晴翔

ぼくは年中のころから空手を習っています。空手のけいこはきびしくて、大変なこともあります。がつづけていくうちに少しずつ強くなっていきました。今年、ようやく黒帯をとることができました。

この夏休みに、母が勤めている病院で、空手のレクリエーションをすることになりました。母の病院はリハビリする病院で、病気や事故で体が思うように動かなくなった人が毎日がんばっています。そこで、小学二年生から高校生までの空手の仲間七人と一緒に参加しました。はじめに看護部長さんのお話がありました。

「ここはリハビリの病院です。ふざけたりするととても危ないです。約束を守ってください。」

と聞いて、少しきんちょうしました。ぼく達は、ただ楽しく演舞するだけでなく、見に来てくださる方々に元気を届けたいと思いました。

ぼくたちは、まず空手の形をしました。大きな声で気合を出し、力強く演じました。そのあとに組手の演武をしました。激しい動きや技を見せると、見ていた人達が、おどろいたように目を見開いているのが分かりました。

見に来てくれたのは、車いすに乗った人や、おじいさん、おばあさんなど、いろいろな方でした。終わったあと、力強い拍手がおこりました。ぼくはその拍手に元気づけられました。病気やけがで大変な思いをしている人がぼくたちの空手を見て元気を出してくれたならうれしいなと思いました。

最後に、一人のおばあさんが「がんばってね。」と声をかけてくれて、ぼくの手をしっかりとにぎってくれました。その手は冷たかったけど、なぜだかとてもあたたかく感じました。その時ぼくは心がじんときまりました。あとで母から聞いたら、この病院に入院している人は、三カ月から半年も家に帰れないそうです。

毎日リハビリをがんばっているけど、つらくて苦しいことも多いと聞きました。ぼくは、夏の暑い日がつづいているけど、どうか元気を出してがんばってほしいと心から思いました。それと同時に、町の中でお年寄りや体の不自由な人を見つけたら、ふざけたりぶつかったりしないようにしたいと思いました。どんなことでも、だれかを大切にしたい気持ちにつながると気づいたからです。

今回の体験で、空手を通して自分の心の輪を広げることができました。これからも、空手だけでなく、日々の生活の中でも、人への思いやり、みんなが笑顔になれるようにしていきたいです。